

場所遊ぶ。遊びには、そういった意味で何かに対する反抗的な面があるのだろうか？

⑨ 子どもの遊びは、時々残酷な面がある。子どもがたくさん集まる遊びは、わりあい、攻撃的なものが多いと社会学者はいつている。ということは、いろいろな部族が集まるとお互いにけんかをするという人間の習性にも似ている。

⑩ 子どもはごちゃごちゃした場所や空地などが、隠れたり、探検できるので好きである。

⑪ 子どもは遊びを発明するというより、模倣していく。昔あった遊びが今ないというのは、人為的になくなったのではなく、子どもがまちがえておぼえたり、聞いて変わってしまったのである。

以上本文からの抜萃ですが、このあと、著者はゲームを十二種類に分け、それぞれに属する子どもの遊びをこまかく紹介しています。文化的な背景がないと十分理解できませんが、その中でわが国の子どもの遊びとの共通の面をみつけるのも楽しいものです。

News Week

22th, May

1972

雑誌ニューズウィークの五月二十二日号（一九七二年）の教育欄は、「学習するのに幼すぎることはない」といった題で、米全国各地での幼児教育運動の盛んな動きをとりあげています。その中から困いこみの記事をご紹介します。これは「親は何をしてやれるか」と題して、数名の心理学者や教育者に一言ずつ尋ねたものです。以下はその中からの抜萃です。

母親がすることは何でしょうか？ 急速におこった幼児教育の波の中で、多くの母親たちは不安にただうろたえるばかりです。ジョニーは、二歳のお誕生日までにアルファベットを知らなくってはならないのでしょうか。スージーは小さな頭の中に、たくさんのお話を詰めこまなくてはならないのでしょうか。専門家は口をそろえて、早期学習は大切だ、その多くは、両親にゆだねられていて、出発が悪いと子どもの人生をだいなしにして

しまう、といひます。

しかし、普通の良心的な親であれば、そんなに恐れることはない、彼らはいつています。

イリノイ大学の教育学部の教授であるハント(J. Mc Vicker Hunt)は次のようにいひます。幼児教育の最も効果的な手がかりは、子どもの興味と感激です。もし子どもがある物へ手をのばそうとしていたら、その子どもはその時非常に大切な経験をしているのです。立派な母親ならば、簡単にその物を子どものそばへ投げてはやらないでしょう。彼女は子どもの近くへ投げるのであって、手元まで持つていってはやらないのです。そうすれば、子どもはその物を得ようとして非常にいろいろな経験をすることになるからです。われわれは常に子どもがイニシアティブをとるようにし、彼らを自分たちの力の中に入れてしまわないようにしなければならぬ。他の子どもが自分の子どもより進んでいると親が感じた時、自分の子どもに無理をしい、そして問題が起こるのである。

ノースキャロライナ大学の国立精神衛生研究所の幼児研究グループの前ディレクターであるシャエファア教授(Earl S. Schaefer)は次のようにいひます。もし母親が自分のことを、家庭の主婦というより、母親教師と思えば、自分の役割についてもっとよくわかるのではないか。教育者として、親は言葉を

強調して使ひながら、子どもと活動や経験をわかちあうよう努力をしなければならぬ。たとえば、食料品屋さんへ行つてそこにあるものについて話し、料理をしながらも、それについてしゃべる。本を見る時も話し、食事の時もししゃべる。このように教育というものは、生活の中にあるのです。

シラキュウス大学の子どもセンターのディレクターであるラリー(Ronald Lally)は、生まれてから十八カ月の間に子どもとの社会的交流の九〇パーセントは、着物をきせたり、食物を与えている時など、子どもの世話をしている間に起こるといひている。たとえば、親は子どものおむつをできるだけすばやくとりかえる必要はないので、この時を子どもとの交流のチャンスにつかうといひ。子どもの世話をしながら笑つたり、話しかけたりたくさんできるものです。そしてこういう時こそが、子どもの生活の中で最も大切な部分なのです。

ハーバード大学の教育学部の教授であるホワイト(Burton White)は、優秀な子どもの母親は、子どもがその時々々に何に興味をいだいているか知り、そのことについて十分子どもと話ししてすすすといひている。子どもの興味はあまり持続するものではないけれど、だいたい平均して二十秒くらいは、子どもが先導して続くものです。母親は子どもの興味をひくような家庭をつくり、子どもが自由に声を出したり、好奇心を持てるよう

にしてやるのです。子どもを拘束することのないように。ということは、プレイペン（幼児用遊びわく）やクリップ（幼児用わくつきベッド）を使うなどということではなく、使ってもよいが、あまりに長い間は入れておかないようにということです。母親は少なくとも一日に一時間以上は十分に子どもに注意をむけてあげたらよいでしょう。

シカゴ大学の教育学部の教授であるブルーム (Benjamin S. Bloom) は、もし一言でいえるというなら、親は進んで集まって自分たちがそれぞれ子どもにとつた方法について話し合い、意見を交換すべきでしょう。幼児教育は家族を中心としたもので、研究所の中で行なわれるものではありません。多分、ひとりの親は他の親よりも、少しだけ多く知っているかもしれない。けれど親は専門家のように、たくさん知っている必要はないのです。ただ少し知っているということ、お兄さん程度でよいのです。親は意見を交換したり、本を読んだり、フィルムを見たり、簡単な研究をして、少しでも不安をとりのぞくのです。そうすれば、子どもから反対に教えられるということに気づくでしょう。

いろいろな専門家と話して、誰もがいうことは、どんな親でも幼児期の教育や思いやりや勇気にぶつかるといふことです。子どもを育てる中で最少限度の要求は、人間にとつて決してお金のかかることではないと、ハーバード大のホワイトはいう。親は、非常に頭がよい必要もないし、よい仕事を持っている必要もない。お金持でなくても、必ずしも幸福な結婚をしてなくてもよい。そして、子どもの教育のためにまる一日中を使うこともないのだという。

(十文字学園女子短期大学)

幼児の教育 第七十一巻 第九号

九月号 定価一〇〇円

昭和四十七年八月二十五日印刷
昭和四十七年九月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

111 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いたします